

目次

ページ

都市計画研究会	第2回都市計画研究会	・ テーマ 都市再生とコンパクトシティ 講演 海道 清信氏	1, 2
	前日企画見学会	・ ボンネットバスツアー	2, 3
都市計画学会全国	前日企画シンポジウム	・ テーマ 公共空間の賑わい利用とまちづくり	3~5
大会企画	当日企画シンポジウム	・ テーマ パリアフリーのまちづくりを点検する	5, 6
	学術研究論文発表会報告	・ 実行委員長 石丸紀興	7, 8
まち並みフォーラム		・ テーマ まち並みはどこへいく / 講演 松山巖氏ほか	9~12
四国地区における見学会と懇談会		・ 高松市(美しく魅力的なまちづくりを目指して - 景観の視点から)	13
学術講演会		・ テーマ まちのづくりをテーマとした2題の講演	14
ホットコーナー(特別寄稿)		・ カンボジア・フィリピンへ(広島工業大学 脇田祥尚氏)	15, 16
会員紹介		・ 熊野稔氏、澁谷俊彦氏	17
今後の活動計画	・ 編集後記		18

第2回都市計画研究会

都市再生とコンパクトシティ

海道 清信氏(名城大学 教授)



コンパクトシティをテーマに、その基本理念やヨーロッパを中心とした諸外国の事例を踏まえて、日本型コンパクトシティの具体象について議論する場となった。

<講演の概要>

1. はじめに

大学を卒業後、地域振興公団に入社し、地方都市におけるニュータウンの開発プロジェクトを手掛け、広島では広島大学の統合移転や高屋ニュータウンの事業に携わった。1995年から名城大学に奉職し、学生時代から関心の高かった都市の空間構造に関する研究に取り組んでいる。これまでコンパクトシティ論の研究に取り組んできているが、近年では都市再生などに関心を持っている。

2. コンパクトシティとは

我が国の近代都市は、都市化や交通手段の発達による郊外化など成長期を経て、20世紀後半は衰退期にあった。21世紀の都市は成熟期の段階にあり、都市の再構成による都市再生が求められている。

このような中でコンパクトシティは、以下の6つの基本理念に基づく中期的な都市再生手法を行うものである。

- スプロール抑制
- 既成市街地の再生
- 居住地空間の再構成
- 自動車交通・利用の抑制
- 自然と資源の保全活用
- 計画民主主義

コンパクトシティを実現するためには、単純に都市を狭く高密度化するのではなく、これらの基本理念に基づいて地域に応じた独自の解決策、都市像を見出すための計画づくりが必要である。またそのための政策やねらいのバランスが必要であり、特定の側面だけが強調されて実施されると、社会、経済、環境に大きなマイナスが予想される。

3. 西洋と日本のコンパクトシティ

コンパクトシティのルーツは、ヨーロッパの中世都市(特にオランダ)にあり、持続可能(サステナブル)な都市形態であることが求められていた。

一方、我が国のコンパクトシティの原像は、江戸時代の城下町に設定されるが、自然や周辺農村との共生といった点でヨーロッパ中世都市とは異なる特性を有していた。

都市計画学会全国大会

日本都市計画学会大会前日企画

見学会「ボンネットバスで行く呉のまち巡り」

日時：2004年11月12日(金)13:30~16:30

コース：13:30 JR呉駅集合

大和ミュージアム(呉市海事歴史科学館)

両城地区(斜面市街地)

アレイからすこじま

蔵本通り

16:30 解散, シンポジウム会場へ

主催 (社)日本都市計画学会第39回学術研究論文発表会実行委員会

(社)日本都市計画学会中国四国支部

後援 呉市、広島市

協賛 広島県都市計画協会

参加者 34人

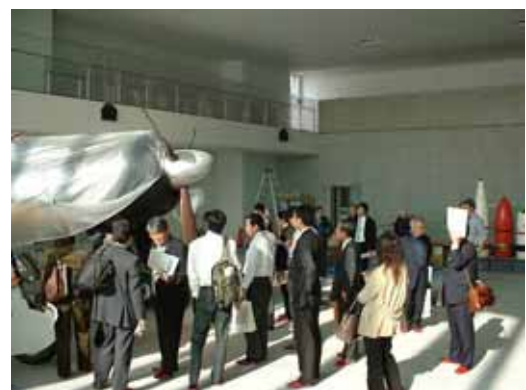
内容

日本都市計画学会大会の前日に、呉市交通局の持つ観光用ボンネットバスでの呉のまち巡りが行われた。当日は天候にも恵まれ、地元広島研究者、大学生、留学生をはじめ、全国からの参加により総勢34名でのまち巡りとなった。



(ボンネットバス)

JR呉駅に集合した一行は、全員乗ると満員になるボンネットバスに乗り込み、呉市役所の濱井さんおよび呉市交通局のバスガイドさんの案内により、最初に呉駅の南に建築中の大和ミュージアム(呉市海事歴史科学館)を訪問した。大和ミュージアムは平成17年4月にオープン予定であり、戦艦大和の10分の1模型や零式艦上戦闘機、人間魚雷「回天」などの実物資料などにより戦争の悲惨さや平和の大切さを伝える展示室を中心に見学することができた。



(大和ミュージアム)

また我が国は市壁を持たないなど近代の都市化の過程でスプロール化しやすい空間構造であった。明治以降の都市化は、低密度な武家地の再開発からはじまり、グリッド状の道路配置といった都市内部の構造と、市街地周辺の耕地整理、零細な土地所有、造成しやすい安価な丘陵地などの空間条件もスプロール化を助長した。このような中で50万都市長崎は、地形的制約が大きいことから地方都市の中でも高密度都市といえよう。

各国のスプロール事例をみると、スプロールの本場のアメリカでは自動車利用を前提とした郊外住宅開発が進み、都市施設が郊外に拡散した。そのため1990年代には都市の成長を管理するスマートグロース政策が生まれている。

また、ロンドンやバーミンガムなどイギリスの主要都市ではグリーンベルトが市街地拡大を防いできたが、一方でインナーエリアの問題居住地の問題を抱えるようになった。そのためバーミンガムでは、1980年代から「シティセンターの拡大」、「複合機能エリアの形成」、「自動車都市のイメージ打破」、「24時間都市」及び「都市居住」などを都心再生戦略として取り組み、90年代後半には既存建物の改修や複合機能を持ったMail Boxの再開発などにより大きく甦った。またベニスよりも総延長が長い運河ネットワークを保全するとともに、舟運航やレストラン・散歩道など水辺の再整備による有効活用に取り組んでいる。

その他の事例として、キングスクロス・セントラル再開発事業は、英国でも有数の貧困地域で徹底した住民参加に取り組んだ大規模複合機能再開発事業として特長的である。またスペイン・ビルバオは、都市のシンボルとしてのグッゲンハイム美術館や、建築家によりデザインされた新しい交通施設(空港、地下鉄、鉄道など)で優れた都市景観を形成し、都市再生に取り組んだ事例である。

<まとめ>

日本の都市はスプロールの本場のアメリカ型である。都市と農村、自然の区分が弱いことが日本の空間構造の特徴で、これがスプロールを助長する要因である。都心部をみても、周辺への日照に配慮もせず中高層が連立する「ドミノマンション」や、東京六本木、汐留、品川などの「都市再生」プロジェクトはどれだけ人々の生活を豊かにする公共性を生み出したのか、海道先生は警鐘を鳴らす。

確かにインフラ整備の効率性などを考えるとコンパクトシティは有効な手段であるが、コンパクトシティが目的となっては都市の個性が発揮されないばかりでなく、真に暮らしやすいまちは実現しないであろう。それぞれの都市らしさを活かしたコンパクトシティのあり方を探っていくことが日本型のコンパクトシティ論、我がまちのコンパクトシティ論ではないであろうか。

(文責 周藤浩司)

その後、旧海軍将校も住んだ斜面市街地である両城地区へ向かい、映画「海猿(ウミザル)」のロケ地として観光客が増えている急傾斜地の階段やそこでの住居などを見学した。



(両城地区)

斜面市街地を後にした一行は、車中にて名物のアイスもなかを食しながら、旧海軍工廠のレンガ建物が並ぶ道路に沿って作られた公園「アレイからすこじま」を訪れた。潜水艦基地を目の前に、海軍を中心に街づくりをしてきた呉の歴史についての説明を聞いた。



(アレイからすこじま)

最後に呉市のシンボルロードである蔵本通りへ向かい、屋台通りを可能にした整備手法や、実際に屋台の开店準備風景などを実際に目にすることができた。



(屋台の準備風景)

限られた時間の中で、呉市の主要な部分を手際よく見学でき、参加者の満足度は高かったのではないかと。呉市役所の濱井さんをはじめ職員の方々の綿密な計画と実施に感謝します。【報告 吉原俊朗】

シンポジウム「公共空間の賑わい利用とまちづくり」

日時：2004年11月12日(金) 17:00～19:30
会場：つばき会館4階音楽ホール(呉市中央6丁目2-9)
主催 (社)日本都市計画学会第39回学術研究論文発表会実行委員会
(社)日本都市計画学会中国四国支部

後援 呉市、広島市
協賛 広島県都市計画協会
趣旨 最近、公共施設政策が大きく方向転換しようとしている。その一つは公共施設における「造る」から「使う」への方向転換であり、公共空間の賑わい利用が課題となっている。しかし、そこには絡み合う制約、行政の姿勢、市民のコンセンサスといった壁がある。

そこで、事例に見る光と影を検証し、今後のまちづくりのあり方を踏まえた、公共空間の賑わい利用のあり方、課題、展望を明らかにしたい。

参加者 約70人

構成

開会 実行委員会企画・行事部会長 間野 博

挨拶

(社)日本都市計画学会中国四国支部長 杉恵 頼寧
呉市都市政策部長 村上義則

問題提起

工学院大学工学部建築都市デザイン学科

教授 倉田 直道

パネルディスカッション

コーディネータ：倉田 直道

パネリスト

呉市土木建設部公園緑地課長 川越 三正

赤ちょうちん通り屋台経営者組合長 坂本 スエコ

広島市都市計画局都市政策部まちづくり担当課長

佐名田 敬荘

広島工業大学工学部建設工学科助教授 福田 由美子

討論

終了

蔵本通りの屋台へ



概要

間野部会長開会 高速道路建設をはじめ公共事業の見直しが議論される中、造ったものの活用、とりわけ都市や地域活性化のための公共施設の賑わい利用が全国的な課題。呉市の蔵本通り屋台や広島市の水辺の取り組み事例を検証し、今後のまちづくりのあり方を踏まえた公共空間の賑わい利用のあり方、課題、展望を明らかにしたい。

杉恵支部長挨拶 中国四国支部は三年目を迎えた。大会の開催にあたり、市民と共に交流できるプログラムを準備したので、議論は熱くお願いしたい。大会初日の支部主催

のワークショップにも是非おこしいただきたい。

村上呉市都市政策部長(小笠原呉市長メッセージ)景観形成モデル事業などにより都市空間の活用を進めてきた。平成17年3月市域が倍になる。公共空間は、蔵本通りのような常設利用のほか、食の祭典など定期イベント利用もあり、都市空間に付加価値をつけていきたい。今後は島嶼部での活用も課題。このシンポジウム意義深い。

倉田教授問題提起講演

- 0. 公共施設設計の際に使われ方を意識するように、現在、国では公共施設の利活用など規制緩和を議論中。
- 1. 歴史的背景 道路、寺社、河原などの広場、花見の名所、市場などがあり、特徴として、自然と一体、アジア的、仮設、変化の多様性があげられる。
- 2. 法制度 制度的には、道路交通法 ハードル高い、市町条例 ケースバイケース、活用のための各種要綱概ね推進であり、近年、河川法が改正された。
- 3. 利用分類 祭り、オープンカフェ、イベント、市場、遊覧船、物販、屋台などのタイプがある。
- 4. 課題 本来機能維持、安全性、非営利・公平性、環境、衛生、苦情対応がある。利用促進策としては、公開空地の活用、設備、地域管理のほか、本来機能と賑わいのバランス、公平、安全、民間参入などがある。
- 5. 海外事例

海外では、公共空間利活用は文化として定着、都市内の高いアメニティが評価、パブリックライフに市民メリット、ビジネスチャンスの拡大、料金が財源にパリ、コペンハーゲン、サンフランシスコ、サンタモニカ・・・、欧米も努力の結果で現在がある。

海外諸国における公共空間の賑わい利用の実態と制度

賑わい利用に関する制度などの枠組み

- 一般的なルール規定(オープンカフェ)
 - 「歩行者通行ゾーン」と「利用可能ゾーン」の明確区分
 - 場所、利用面積、利用内容に応じた利用料金を個別利用者から徴収
 - 営業主体:沿道の1階で飲食店を営業するものが店の地先に設置
 - 利用可能区域:営業店舗の全面幅内
 - 営業時間・期間:一般的に冬季及び深夜の営業禁止
 - 管理:夜間の片付け、清掃の義務づけ
 - 営業者の賠償責任の明確化と保険加入の義務化等
 - 施設の形態・構造:簡易な構造、色彩・材料、設置位置に関する規定等
 - 許可・手続き:一年ごとに申請手続き、違反時の営業停止等

パネルディスカッション 川越課長報告

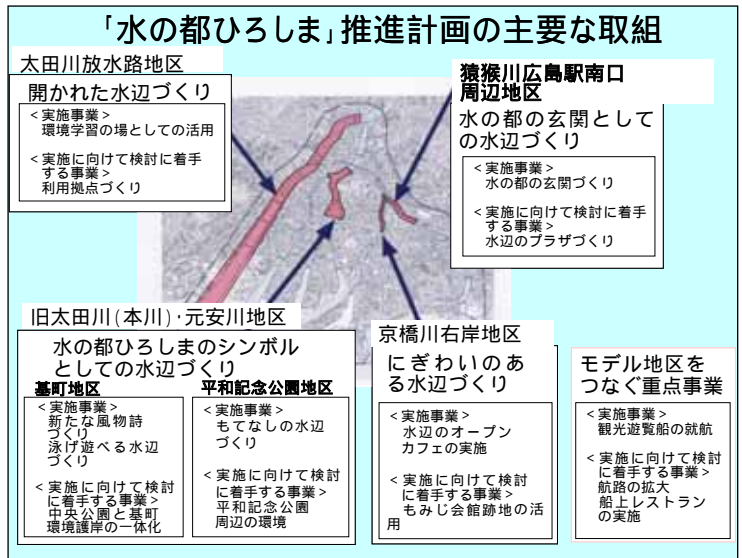
大正13年には夜なきソバの屋台があった記録がある。その後、堺川左岸から右岸蔵本とおり側へ移転。蔵本通り6車線から4車線へ変更した時は、22軒。平成13年には8軒となり、募集することに。7軒の募集に48軒の応募があり、現在の屋台が選定された。新店舗は新しいメニューを取り入れ、利用客は20代が7割に達する。市外からが5割であり、課題は路上駐車である。

坂本組合長報告 自分の店は昭和43年から。当時蔵本通りは木々に囲まれて暗かった印象がある。今は明るく女性

や若者が多くなった。屋台の魅力は「簡単、店の人やお客同志の会話、安いこと」である。常連客が5割。組合としての決め事は、総会、掃除、水道代金の配分であり、課題は、路上駐車と、あえて言えば、新しい店が早くしまるとの客の声程度。



佐名田課長事例報告 広島市と県、国では、「使う、つくる、つなぐ」で 都市の楽しみ方を創出し、都市観光の舞台となる、個性と魅力ある風景をつくる、「水の都ひろしま構想」を策定。現在、都市再生の規制緩和モデルの指定を受けて社会実験中である。船上レストラン設置の取り組みを被爆60周年記念事業ではじめたい。公共空間の活用では、受益者の施設管理やアダプト制度の活用など、公益と私益のバランスをとる事が大切。



公共空間を個人が使うためには

- 公共性の保証
 - 機会の公平性
 - 公共の意識
 - 信頼関係
 - 組織
- 公益の解釈
 - 経済活動で得られる利益
 - 金銭的な利益以外の利益

・にぎわいをつくる
・風景をつくる
・文化をつくる
・誇りや自慢をつくる

・他者の存在
 ~ 見守る目
 ~ チェックする目

暗黙の了解、認知 公益と私益のバランス

都市計画学会当日企画 ワークショップ

バリアフリーのまちづくりを点検する

- 広島の事例を中心に -

福田助教授公共空間活用の評価 公的な空間には、複数の人がともに使う「共空間」もある。国や自治体以外が、私たちのために作り、他者へ配慮しながら使う「共空間」である。愛着やなじみが手厚い管理を生み、利用につながる。

討論

川越課長 赤ちょうちん通り屋台の公共性については、公園区域内ではあるが、呉市の活性化の観点から承認されている。公共性の課題は、屋台経営者の私的利益と近隣住民の夜間の苦情とのバランス問題。

坂本組合長 現実に大声のトラブルや駐車違反の指導が課題である。

川越課長 ルールを守るための組合加入を条件にしており、市民からの苦情を組合に返している。占用は公園区域であり、制度的に道路よりは、イベントやりやすい。

佐名田課長 公共施設の性格上、利活用ニーズが地元と密着していることが望まれる。

福田助教授 行政でない公共という概念も必要。地元と市民団体の間でも温度差があり、みんなで考えることが重要。例えば河岸緑地であれば、水上タクシーがカフェを応援するなどの連携もある。

倉田教授 空間としても、関係者としても、つながりの中で、先進ノウハウを積んでいく姿が広島にある。平和大通りの街路上は今どうか。

佐名田課長 かつてのカフェは赤字によりなくなった。平和大通りの緑地部分が管理上で公園になれば楽になるだろう。道路部局もモデル的な取り組みを検討中であり、これからである。

川越課長 15 軒体制でのイベントの開催などを皮きりに共同事業をスタートさせたい。通りとしてのイメージの向上、定着をめざしたい。

坂本組合長 赤ちょうちん通りの名前の由来を大切にしたい。

福田助教授 有効活用、賑わい利用をやってみせる事が大切。成功も反省もこれから。例え違法でも市民は了解の場合もあり、こうした実態により次第にルールが変更されていく。

佐名田課長 水の都の公共空間の賑わい利用の情報を全国に発信していきたい。JRのディスティネーションキャンペーンに乗りたい。

倉田教授まとめ

- ・呉市の事例は全国の先取り型。
- ・広島市の社会実験は、大きな枠組みづくりと、総合的なまちづくりにつながるという新たな挑戦。
- ・公共空間活用イベントは、都市住民のパブリックライフ確立のため、毎日実施できるような展開が必要。
- ・公から、共へ 地域主導と脱行政でやっていく。
- ・朝市などを含めて多様な取り組みが必要である。

【報告 企画・行事部会 松田智仁】

第39回学術研究論文発表会・ワークショップの報告

テーマ：バリアフリーのまちづくりを点検する

- 広島の事例を中心に -

日時：2004年11月13日(土) 16:00~18:00

場所：広島国際大学呉キャンパス1号館7階

メディアホール

主催：都市計画学会中国四国支部学術委員会(委員長：高井広行・近畿大学教授)

コーディネーター：藤村安則氏(中央復建コンサルタント(株)中国支社長)

パネリスト：

向井隆一氏(広島市道路交通局都市交通部交通政策担当課長)

松尾 修氏(呉市都市政策部都市計画課長)

橋川敏信氏(東広島市都市部次長兼都市計画課長)

岡森正人氏(福山市建設部交通政策課長)

中村隆行氏(ひろしまNPOセンター常務理事)

本ワークショップは、広島県下の主要都市(広島市・福山市・呉市・東広島市)の行政担当者とNPOの方々を招き、バリアフリー・ユニバーサルデザイン等に関する現状の取り組みや将来の計画・考え方などを紹介し、現在の問題点と将来の方向性について議論した。

1. 事例紹介

1) 広島駅周辺重点整備・低床式電車(向井)

広島市では平成14年度に作成した「JR広島駅周辺地区交通バリアフリー基本構想」に基づき広島駅周辺の施設整備を進め、平成11年3月から超低床車両「グリーンムバー」を運行し、電停の緩勾配スロープ・視覚障害者誘導用ブロックの設置や乗降場の広幅員化などを行っている。

しかし平成22年までに全ての駅で完全なバリアフリー化を行うことは現実的に難しく、市町村の実状を踏まえたバリアフリー化が必要である。今後、高齢者や身体障害者との対話による基本構想の作成、交通バリアフリー法とハートビル法との連携、土木と建築との一体的なバリアフリー化などは課題である。

2) 呉駅・広～阿賀駅周辺のバリアフリー(松尾)

呉市は平成13年に全国で3番目という早さで「呉市交通バリアフリー基本構想」を作成し、呉駅前横断歩道橋へのエレベーターの設置や広支所前バス停のフラット化、広駅周辺歩道の広幅員化、市民参加型バリアフリー化活動(高齢者・障害者の疑似体験、点字ブロックやエレベーターなどの位置を示したハーティマップの作成(観光客にも好評)などを実施してきた。また、避難場所としての小学校、中学校、体育館などの大規模な建築物のバリアフリー化を図っている。

今後、車いす利用者と視覚障害者のそれぞれのニーズに合った段差の設定、ソフト面でのバリアフリーとして小中学生の総合学習の時間などを活用して優しい心を育む教育をどう進めていくかは課題である。

3) 東広島市移動円滑化基本構想(橘川)

今年市制施行30周年を迎えている東広島市では、西条駅、八本松駅、西高屋駅の周辺を対象とした「東広島市交通バリアフリー基本構想」を作成している。西条駅では駅の南北を結ぶ自由通路やエレベーターの設置、段差の解消、視覚障害者誘導用ブロックの設置、低床バスの導入などを今後行う予定である。

現状の課題としては、整備に費用と時間がかかること、駅から離れている病院などの施設との円滑なネットワーク形成、公共建築物のバリアフリー化の推進、歩道での違法駐輪への対策などがある。

4) ワンコインループバスといちおしマップ

(おでかけマップ)とバリアフリー(岡森)

福山市では、中心市街地の活性化、公共交通の利用促進、交通空白不便地域の解消などを目的として、ワンコインループバスを試行運行している。バス停に設置している端末や携帯電話から現在のバスの位置や到着時間を確認できるバスロケーションシステムを採用し、市民によるボランティアバスガイドなども実施している。平成17年度に交通バリアフリー基本構想を策定する予定である。福山駅前の広場整備や再開発などが進んでいることから、今後、一体的なバリアフリー化を進めると同時に、こころのバリアフリー化が重要である。

5) 公共交通ボランティア活動社会実験(中村)

ひろしまNPOセンターでは、心や国土交通省の委託を受けて交通バリアフリーの社会実験を実施している。広島市内の交通拠点である広島駅と広島港、バスセンターに10時から16時まで常駐のボランティアを設置している。今後は介護保険のヘルパー制度などとも連携すること、ボランティアの集まりを法人化できるようにするなど、制度のバリアフリー化も必要である。

2. 点検の視点・総括(藤村)



バリアフリーは、物理的なバリアを取り除くだけでなく、「こころ」や「しくみ」のバリアを解消することや、高齢

者や障害者だけでなく全ての人に使いやすい「ユニバーサルデザイン」の視点が必要である。

また、住む人のニーズにあった個性と愛着のあるまちづくりが必要であり、そのためには調査段階、計画段階、事業実施段階、事後評価段階などの各段階において、様々な市民参加の手法を活用していくことが望まれる。

また、会場からバリアフリー基本構想の策定後のフォローアップにおけるNPOの役割、災害時における避難場所でのバリアフリー化などに関する活発な議論がなされた。

<文責：張峻屹・安野淳>



(個人的な感想)

各パネリストから、各都市の事例が報告された。各都市の個性が感じられたが、全体としてはバリアフリー化の取組は始まったばかりである。効率化を充実させる一方、障害者等を含めてすべての市民が利用しやすいまちづくりを目指すのがユニバーサルデザインであるが、現実にはまだまだといった印象である。

今回の新潟中越地震の例を出すまでもなく、健常者以上に移動・活動の自由を奪われやすい障害者に対して、最悪の状態を絶えず意識した対策への提言は印象的であった。一方、中村氏が指摘した障害者の目線に立った改善については、説得力があり、できる限り多くの立場・視点からの確認の必要性を感じた。

また、事例のうち、電車・バスなど公共交通機関に関するものが比較的多く、移動を保障していくことの重要性も感じた。さらに、2cmの段差をめぐる議論、地下街などのバリアフリー化の問題などについては今後の大きな課題である。

最後にコーディネーターの藤村氏が指摘した、仕組み、こころ、ハードというバリアフリーを進める上でのキーワードは印象的である。他の学会、学際領域などとの連携が期待されることである。

さらに、土木構造物と建築物とのバリアフリーでの連携などが改めて指摘され、日本都市計画学会としての一体的な取組みが必要かつ重要である。

(文責 宮本茂)

日本都市計画学会第39回学術研究論文発表会報告

同実行委員会委員長(広島国際大学)石丸紀興

一昨年度における大阪市立大学での日本都市計画学会第37回学術研究論文発表会(学会と略称する)から懸案であった学会開催を、11月13、14日に広島国際大学をメイン会場として開催することができましたこと、ご協力いただいた関係者の皆様に、そしてご参加いただいた方々に、心から感謝いたします。初日の午前中に、呉線の広島からの快速が間引かれるという不運があり、何人かの参加者に遅れが発生しました以外には、さしたる混乱も、トラブルもなく、順調に学会運営ができましたことは、ひとえに実行委員会委員の皆様のご周到な用意と対応があったからだと思えます。4回の実行委員会会議にはご多忙中にもかかわらず、多くの委員の方々にご参加いただきましたことも、遅くなりましたがここに感謝申し上げます(先日12月18日に最終的に実行委員会を開いて解散を決定しましたので、これを含めると全5回)。中国四国支部長の杉恵頼寧先生には、実行委員会副委員長を担当していただきましたこと、御礼申し上げます。

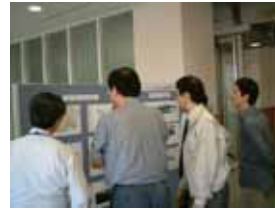


写真は広島空港での
歓迎用立て看板



学術研究論文発表会

今回の学会開催では、大学の施設が新築間もないこともあって、外からの持ち込みが必要なくほぼ完備していましたことも、究めて有効でした。5年前の広島大学での日本建築学会大会の気の遠くなるような規模での会場準備を思い出しますと、本学が都市計画学会クラスの学会開催に適していたことを実感いたしました。発表者の交代による時間のロスを除けば(これは発表者側の責任です)本来の学術論文の発表はほとんど問題なく予定通り進化したと考えてよいでしょう。広国大の坂本淳二先生を中心とした会場・運営部会のお手並みによるものでしょう。タイムキーパーとしてあるいは液晶スライドプロジェクターの切り替え補助者として、広島大学、近畿大学工学部、呉高専の学生・院生のご協力を得ましたことも会場運営に貢献していただいたことでありましょう。



呉の都市形成史等の
展示準備作業



新潟県中越地震報告会

ワークショップも、中国四国支部からの提案で実施された「バリアフリーのまちづくりを点検する - 広島の事例を中心に - 」のテーマを含めて4テーマと、飛び入り企画での新潟県中越地震現地報告会を含めて実施されました。特にバリアフリーテーマには地元住民、障害者の参加もあって、ワークショップを開催した意義も達成できたのではないかと考えております。近畿大学工学部の高井広行先生を中心とした企画に感謝申し上げます。



中国四国支部企画で実施されたワークショップ

学会において登録受付の参加者は437名(全員が参加費納入者というわけではないが)であり、2日にわたりその2倍には及ばないものの多くの参加者があり、国外からもドイツの研究者の参加がありました。

懇親会も多数の参加者があり、会場は熱気に包まれました。予想を越える参加者といつてよいでありましょう。「肉じゃが」は早々に払底するほどの人気でした。地酒は残ってしまいましたが、多くの方に堪能していただいたことでしょう。懇親会部会の野久尾尚志先生、岡本二郎先生には多大なご配慮をいただきました。

学会終了後、秋本福雄学術委員長からは、「キャンパス開学三年目の多忙な時期に、ご尽力戴き、誠に有難うございました。昨年に変わらぬ盛況で、活発な質疑、議論が行われ、充実した発表会であったと思います。また、懇親会では、石丸先生より、次年度開催校の北原先生に暖かく引継ぎを行っていただき、感謝に耐えません。今後とも、引きつづき、学術委員会の活動を見守り戴き、ご指導、ご鞭撻下さるようお願い申し上げます。」と丁寧なお礼のお言葉をいただきました。

また、学会開催に関連した付随行事として 間野博先生を中心とした企画・行事部会による企画・運営のもとに、前日の11月12日呉市において、見学会・シンポジウム等を実施しました。見学会は「ボンネットバスで行く呉のま

ち巡り」で、JR 呉駅北改札口前を出発して、呉駅周辺のバリアフリー化整備状況や呉駅南土地区画整理事業、呉市海事歴史科学館(戦艦大和の模型)、両城地区(旧海軍将校が住んだ斜面市街地)、呉の中心市街地(今西通り～本通)、アレイからすこじま(おしゃれな公園と潜水艦基地)、呉市シンボルロード蔵本通り(屋台通り)などをボンネットバスと徒歩で見学して回ろうというもので、呉市における都市計画的な課題や魅力のスポットを巡りました。シンポジウムは「公共空間の賑わい利用とまちづくり」のテーマで、公共空間の賑わい利用に向けて、多くの課題を検討していこうとするもので、工学院大学建築都市デザイン学科教授倉田直道先生の問題提起とこの問題の係りをパネリストとした発言によって、公共施設政策への転換を迫るなど、時宜を得た企画となりました。



懇親会後に学会員で店の外まで賑わう屋台

今回の学会開催に当たり、((財))広島観光コンベンションビューローによりましてJR広島駅や広島空港に歓迎用看板を設置していただき、また観光案内等コンベンショングッズやコンベンションバッグを提供していただきましたこと、ひろしま観光コンベンション誌で学会開催企画を紹介していただいたことにも感謝の意を表明します。学会開催に先立ち呉市史編纂室と実行委員(中国四国支部)とで「写真で見る都市形成史」のテーマで呉のまち並み写真等の展示準備が行われたことも報告しておきます。

最後に、広島県都市計画協会による支援もいただき、会計部会の橋本清勇先生の堅実な会計運営によりまして、どこにも付けを回す必要ないように、学会全体の運営において収支を合わせていただきましたことを感謝し、ここに報告する次第であります。

もう一つ付け加えさせていただきますならば、学会開催に合わせて、新広駅から広島国際大学への連絡道路として、古新開南北線という歩行者専用道路がありますが、この道路空間を使って、住環境デザイン学科の学生を中心とした「アート空間プロジェクト」(代表綿谷好哲君)が、正規授業である「アーツアンドクラフト」の非常勤講師である高藤茂先生の指導のもとに、インスタレーション等を施し、アーツ空間を表現してくれました。実はそのため、事前に道路法や道路交通法をクリアするために、呉市と警察当局に申請をする必要が生じたのですが、まさに公共空間の有効利用というテーマに学生たちが挑戦したわけですが、手

続は困難なものでした。最初の打診では、およそそのようなことは不可能というような雰囲気でした。結果的には、ほとんど当初企画どおりに認められたのですが、途中無理ではないかと思うほどでした。そのため、展示作品の完成は大幅に遅くなり、初日の朝にはまだ作業中という有様でした。そして最終的には写真に示しますような作品(?)ができあがりました。



広島新開南北線でのインスタレーション

布を盛大に木々に巻き付け広げたことは目立ちました。日曜日の夕方には付近に住む子どもたちが布に絵を書き込む姿が見られました。



通りの木々に巻き付けられた布に絵を描く子どもたち

また、最近建設された洋服屋(ブティックそのもの)とケーキ屋は究めて協力的であって、学生による店舗空間演出・装飾デザインが可能となり、店主のみならず、店舗を訪れた顧客からも喜ばれることとなりました。この歩行者専用道路の歩行者は多くはなかったのですが、このようなことが作品を展示、表現するという可能性を示しましたことで、大きな意義があったと考えられます。

以上、今回の学会開催に関連しましてご報告申し上げます。

まち並みフォーラム～まち並みはどこへ行く～

日時：2004年11月27日(土)13:00～17:00

場所：広島国際大学広島教育センター

講演&語り合い：講師 松山巖(評論家・作家)

まち並み報告：澁谷俊彦(山陽学園短期大学)

フォーラム：話題提供・ディスカッション

話題提供者：和田嘉宥(米子高専)

地井昭夫(広島国際大学)

釜谷幸志(広島市)

東孝次(NPO 法人まちのよそおいネットワーク)

井手三千男(写真家)

コーディネーター：石丸紀興(広島国際大学)

<趣旨>

まち並み景観に対する関心が高まり、「景観緑三法」が制定された現在、改めて今後のまち並みのあり方について考えたい。そして、現場を見つめ直すことによって、建築や都市計画関係者、技術者・職人、住まい手・使い手・市民と「まち並み」の関わりと課題、さらには「まち並みはどこへ行く」を考え、明日への手がかりを探る機会となることを願い、開催しました。

また、フォーラムが新たなネットワークづくりや取り組みの動機づけ、交流などの場としても生かされることになれば...

公演&語り合い

(講師：松山巖、テーマ：まち場の思想)

東京は愛宕の石工職人の家に生まれ、育ったという作家で建築評論家の松山巖氏に「まち場の思想」と題して、ご講演をいただいた。作家らしく大変含蓄の深い内容のため、ここではごく一部を断片的にしか紹介できないことをお許しいただきたい。



【講演】

- ・ まち並みは生活の場。生活とともに変化している。トリミングされた(本物と違う、生活感のない)まち並みは気持ちが悪い。
- ・ まち並みは誰がつくったか。それは、まち場の職人と商人。まちには子供を教育する力があつた。
- ・ 共生という考え方は傲慢だ。本来人間は自然に寄生させてもらって暮らしている。だから自然に礼を尽くす。人間は自立していない。まちも自立していない。だから外に対して開かれている。
- ・ 巨大開発(容積率の緩和)の問題点。それは、隣地との不平等、エネルギー消費量の増大(地球環境への負荷)、デザインの画一化(この結果建築家の仕事が減る)、超高層建築はまだ解体されたことがない。足場が組めない。解体技術がないままどんどんできている。
- ・ 建築制限、都市計画制限は、景気策として話題に上ることが多いが、本来金とは関係ない。規制緩和は金持

ちが得をする。しかも景観が乱れる。

- ・ 経済学の目的は、不公平はあるが、努力した人がそれなりに見返りを得られる社会をつくること。建築、都市計画も同じはず。
- ・ 自分の仕事に誇りを持てるか。誇りを持って子供に伝えられるか。まちも誇りが大切。まちをつくる人、まちで暮らす人が、まちの誇りをつくる。

【語り合い】

(会場)ブレードランナーに出てくる未来都市は悲惨。地方都市は大都市に活力を吸い取られている。このままでは地方都市は破綻する。逆に東京が破綻すれば地方がよみがえる。

(松山氏)先進国にとって、人口、経済の停滞は必ずしも悪ではない。文化は成熟できる。地方都市が東京と同じ発想を持つ必要はない。職人は生涯現役。老人(退職者)がこれからどう生きていくかを考え、経済優先ではなく、老人が楽しむことができるまちを本気で考えるべき。(会場)地方では都会にない豊かな生活をしている。東京は非日常的に楽しむ場と捉えればよいのではないか。

(松山氏)東京は観光者のまち。見たいものだけ見られるまち。しかし、そこに住むということはまちの良いところとも悪いところとも付き合わなければならない。東京には帰る場所がなくなった。このことを「住み家殺人事件」(松山氏の著書)に書いた。帰る場所があるから非日常(観光)がある。

松山氏の講演のなかで、三島由紀夫の「沈める滝」の話が出た。松山氏の解説によると、主人公の土木技師城所昇(愛を信じない青年)は石と鉄、すなわち技術の象徴、ダムによってやがてなくなる運命にある滝は女性(主人公の最後の女: 顕子: 石のように不感症な人妻)自然の象徴。主人公が長い飯場での生活を終え半年ぶりに集落に降りてきたとき、何気ない日常の風景を見て心が動いていく。そこにはまちの日常があつた...(松山氏の解説を正確に伝えることは到底できません。あくまでも文責: 佐伯ということでご容赦ください。ちなみに、この講演を聴いて20数年ぶりに「沈める滝」を読みました。)

(文責: 佐伯達郎)



まち並み報告

(発表者：山下和也(地域計画工房))

澁谷俊彦(山陽学園短期大学))

「中国地方のまち並み」に掲載されたまち並みのその後について、最近の話題や知らせたい情報について報告があった。

まず、中国五県の概要として、司会の山下氏より紹介があった。鳥取県では、板井原が県の伝建築になったこと、島根県では、大森銀山が2007年の世界遺産の登録に向けて動いていること、山口では近代建築について、保存だけではなく、まちから捕らえようとしていることなどが報告された。



岡山については、澁谷先生より5分強で紹介があった。

ベンガラのまち吹屋では、本片山家がオープンになった。また、吹屋小学校は、全国で一番古いの現役小学校として、テレビでも紹介されている。



岡山名物八つ墓村がまたロケが行われたが、人気がないということが心配される場所である。

茅葺民家ふるさと村(吉永町八塔寺地区)では、茅葺の技術保存を建築士会で始めている。

下津井については、マイナスバランスを保っている。

玉島地区は、岡山県内でも有数の古いまち並みだが、倉敷にできたイオンの影響で、まづい状況になっている。

日生では、まち並みは廃れてきているが、人の動きは活発になってきており、執筆者の江端さんを中心に、お好み焼きや牡蠣を流行らせ、全国でも有名になってきている。

牛窓は停滞してきている。

勝山は一番自慢ができるところで、総務省(旧自治省)から表彰を受けており、西日本でもトップクラスの住民とまち並みがかみ合っている。酒饅頭が名物。

津山では、再開発がのし上っていきまづい状況だが、城東地区で、オダギリ・ジョーのお母さんが、吊るし猿を作り始め、地元の女性たちが軒先に吊るし始めることにより、まちの生活者の顔が見え始めているところである。

足守では、妙な開発が始まっている。

高梁では、西村幸夫先生ががんばっておられて、5団体が出てきているところである。

鴨方は、全国でも数少ない、町屋を保存するため町が買い取って公園にし、地元のボランティア団体(50人程度)がそうめんや花を供給するなど、活発に活動している。

矢掛は、本陣などのメインが残っており、保存について地元の活動も活発なため、財政難に悩む岡山県でも特例的

に補助を出しているところである。

チボリ公園については、社長が交代し、日本でも成功しているテーマパークの社長になっているようである。空き店舗が多いので、山陽短大も協力している。(クリスマスイブに店舗を出すなど)

また、倉敷市中心市街地については、いまだ伝建地区周辺の高層ビルについて、市と事業者との裁判が続いており、市側もまち並みを守るために判はつけないと言っているがなかなか大変な戦いをしているようである。

(文責：福馬晶子)

フォーラム ~話題提供とディスカッション~

1、話題提供

歴史的なまち並みの保存・再生と暮らし：和田嘉宥(米子高専)

津和野町を始め太田市大森銀山、温泉津温泉、倉吉市打吹玉川地区、智頭町板井原集落等の歴史的建造物のまち並みについて現況が紹介された。特に温泉津町



では伝統建造物を調査するだけでなく住民が参加する必要があるとして、子供に街並みの連続立面を描いてもらい、子供達に街並みを知ってもらうことを行った。街並みを書いた子供達が心に残り10年20年経ってどう思うかである。

課題は、歴史的まち並みの空き家が多くなりどのように保存・再生させていくか、また、高齢者が増えているので、それに対する福祉が課題である。

農村漁村の空間変容と課題 - 市町村合併と直接支払いを中心に - : 地井昭夫(広島国際大学)

中山間地域の直接支払いは、農村の環境が保全されることに対してお礼をしようとするものである。日本では2000年から始まったがヨーロッパでは25年前にできている。



安芸高田市の川根地区は、中山間地への直接支払いの集落協定への住民参加率が、非農家を含めて170%(おそらく日本一)で地域住民全員参加の共同作業等を実現している。今後の課題は、新市においても地域振興会の支援を継続するとともに、地方分権ばかりでなくより狭域への「地区分権」も進める必要がある。

広島市の都市美・魅力ある風景づくりの取り組み：釜谷幸志(広島市)

広島都市美計画は、良いものを保存し、悪いものを撤去する考え方である。都市美は、10年20年かかるのでゆっくりと時間をかける必要がある。景観協議は、市民の皆さんと対話方式で7900件に達している。平和大通りの沿道は昭和58年に景観協議の対象区域となっている。リバーフロントの景観は、市民のみでなく観光客から好評を得ている。原爆ドームは、平成8年世界遺産となり、景観のバッファゾーンを設け看板等の景観を重要視している。



これからの風景づくりとして風景づくりマスタープランを策定した。風景づくりは5感に訴えらるとともに広島らしい独自性を出していきたい。

地元発循環型まちづくり：東孝次(NPO 法人まちのよそおいネットワーク)

NPO 法人まちのよそおいネットワークは、景観からの街づくりが重要であると考え「みんなで選ぶまちのよそおい」をキャッチフレーズとする手作り景観賞の募集・審査・表彰という活動に取り組んでいる。



その中で山口県北西部に位置する日置(へき)町においてコムケアの里づくりに取り組んだ。「コムケア」とは、コミュニティケアを略した言葉で、「日置コムケアの里づくり」とは、日置町において、相手を気遣い合い、だれもが安心して気持ちよく生活できる循環型の地域づくりのことである。

福祉・農業・食・環境の融合を目指した日置コムケアの里づくりのための循環型地域づくりは、今後障害者との協働によるニワトリの平飼いや無農薬野菜の栽培について取り組んでいきたいと考えている。

被爆建造物の保存・活用とまち並みづくり：井手三千男(写真家)

1945年8月6日の世界初の核爆弾は、爆発10秒間で広島を壊滅させた。このような中、被爆20年後で使用されていた爆心から半径3kmの範囲の非木造建物は207件中105件、40年後62件、現在は31件である。その中で平和公園内にある燃料会館は、1982年レストランとして整備され、1階は、観光客の案内所とし、2階は観光協会が入居し、形態を変えながら生き続ける建物は珍しい。今後はここを郵

便局として利用したい。

2002年3月国立広島原爆死没者追悼平和記念館がオープンした。建設に先立って発掘すると、被爆の痕跡をとどめる南北の道路、建物跡が検出した。この都市の痕跡を生かした施設づくりに設計変更して欲しかった。



2. 討論とまとめ

広島市の川の景観は、北部の中山間地域の街づくりがあるのでこの景観が保持されていることを認識して欲しい。平和公園から見える看板の追放は評価できるが公園の芝生から人間の追放が起きている。市民で賑わいのある芝生広場が望まれる。

広島市は都市部の看板を景観上すべて追放しようとしているのではない。低層部は、街の賑わいを果たすための看板は望ましいが緑から上の部分でスカイラインを形成するところは景観上看板の自粛をお願いしている。

広島は、斜面緑地が多く残っており美しい景観を保持している。今後は、景観に対する数値を出して検討して欲しい。

ECの街並み景観は、アメリカ型ではなく、中世、近世のまち並みの深刻な選択をした。それによって人がやさしく生き延びていく景観、場が可能となった。

このフォーラムでは、活動、体験、評価軸が多く出るとともにいろいろな素材が出てきた。今後も街並みに対して関わりを持ち、行政、住民は、いろんな場所でどうどうと議論する場を広げる必要がある。(文責：上之博文)



まち並みフォーラム全体を振り返って

【フォーラム開催の発意・企画】

フォーラム開催のきっかけは、日本建築学会中国支部・まち並み研究会が中国新聞社から出版した「中国地方のまち並み」にあります。出版から5年が経過し、販売も一応の目安が付いたことが、根底にありました。

企画のぼんやりとした案は以前からありましたが、タキキ台として形を整えたのは、開催のおよそ半年前です。企画案をつくるに当たっては、以下の点を基本的な考え方としていました(プラス、事務局の荷物を下ろしたい?)。

広島以外の執筆者にも積極的に参加・登場してもらう。都市やまち並みに対して、建築家や有名な建築だけでなく、職人、暮らし、近代・現代といった文脈からも、批判的な視点を含め、話を聞きたい、刺激を受けたい。みんなとても忙しいので、準備にできるだけ労力(負担)をかけない。

【都市計画学会のメンバーのパワーとネットワーク】

フォーラムの準備が始まったのは、都市計画学会中国四国支部の共催の方針が出てからです。実は、準備のコアは、同支部のメンバーで、さらにチラシ作成などには、そのメンバーのつながりで建築士会の方の協力も頂きました。

「準備にできるだけ労力(負担)をかけない。」ということでは臨みましたが、やはり多くの方々の労力(負担)の上で開催できたこととなります。

【松山巖さんをお呼びしたこと】

基調講演には、評論家・作家の松山巖さんをお呼びしました。前記の基本的な考え方とは、松山さんを念頭においたものです。あまり講演をなさらないのですが、じっくりお願いしました。

前記の「講演&語り合い」の報告にもありますが、とても深く、まちや建築の有り様だけでなく、都市計画や建築にたずさわる者、そして個人としての生き方も問いかける内容でした。

余談かもしれませんが、フォーラムの1週間前には、手書きの講演のレジュメが届きました。私にとって、講演のレジュメとは、話の見出し程度をイメージしていたので驚きでした。評論家・作家としての思索のプロセスにふれた思いがしたと同時に、これは学ばねば(盗まねば)と直感しました。是非ともこのままコピーしたいと思ったのですが、松山さんの希望で、配付資料のようにワープロ化してしまいました。

【様々な取り組み・考えに接したこと】

司会をしていて、詰め込み過ぎのプログラムを実感しましたが、話題提供者の方々、コーディネーターの石丸先生が上手く話をまとめられたので、何とかほぼ予定の時間に納めることができました。

時間不足ではあったものの、まち並みを取り巻く様々な状況、その糸口にふれることができたのではないのでしょうか。加えて、各地におけるまち並みづくり・まちづくりの悩み(課題)を感じることができ、それを共有し、支え合う

仕組み・ネットワークが築けたらと思いました。

全体討論のまとめの中であった、金沢のような旦那衆の力は(広島には)ないのだから、「ふつうの市民が、“町衆”となって、それぞれの立場でまち並みについて考え、話し合い、取り組むことが大切」、「まち並みの保存などで対立する状況において、それぞれの立場でオープンに議論する場を生み出す」という考え、次につないでいきたいものです。

【懇親会の盛り上がり】

フォーラムの参加者は80名近くで、ほぼ会場がいっぱいでした。その約半分の方々が懇親会にも参加され、こちらでも熱気にあふれていました。あっという間に時間が過ぎてしまいましたが、2次会も有意義でした。

地井先生のスピーチ。フォーラムでは中山間地域の問題などに対し、様々な提案・示唆をいただきました



松山さんのスピーチ。何を話されたかは、参加者の特権。酔っぱらって、記憶が・・・

【省察：反省とステップ】

何とかフォーラムを終えることができましたが、いくつかの反省点もあります。また、会場で行ったアンケートをみると、フォーラムの評価(講演、話題提供、全体)は高いといえます。同時に、課題なども指摘されています。

こうした反省点などを大きく整理してみます。

詰め込みすぎであることは、企画段階から感じて、何人かからのアドバイスを踏まえ、多少修正していましたが、やはり、消化不良の感は否めません。

そのため、特に話題提供者の発表や質疑応答、全体討論の時間が短く綱渡り的であったこと。

都市計画学会中国四国支部の共催を頂いた段階で、土木系の方々の参画を検討すべきではなかったか。

山下個人の思いが先走り、周りにとまどいと迷惑を掛けていた点。

一方で、今回は会場のこともあり、マスコミを活用しませんでした。会場がほぼ一杯になる参加者でした。

また、フォーラムの翌日には、NPO法人まちのよそおいネットワークの東さんが、会員の方々にフォーラムのことを報告されています。私の方は1か月近くかかりましたが。

また、何人かの方々からメールをいただき、とても感謝し、開催してよかったと、つくづく思いました。

杉恵支部長の「おわりの言葉」にあったように、共催による交流や経験・蓄積を生かしながら、ネットワークを高め、都市計画研究会など次に生かせるようにしたいものです。

最後になりましたが、フォーラムを支えていただいた多くの方々に感謝いたします。(文責:山下和也)

四国地区における見学会と懇親会

プログラム

現場見学

- ・ 日 時：平成16年11月17日13:30～14:30
- ・ 場 所：サンポート高松 シンボルタワーほか



シンボルタワー展望台から高松駅の駅広を見下す

懇談会

- ・ 日 時：平成16年11月17日14:30～17:00
- ・ 場 所：サンポート高松 シンボルタワー17階
オフィスサポートセンター(コクヨ)会議室



懇談会の様子

話題提供の概要

懇談会では、3名の方より話題提供が行われた。その概要を紹介する。

景観に関する国の動向

(四国地方整備局建設部都市調整官 西野 仁氏)

- ・ 景観・緑三法、及び建設部、4県、各県庁所在市を構成メンバーとする「四国地方まち景観連絡会」の存在について紹介。
- ・ 会場から、景観・緑三法を市町村がどこまで使いこなせるか、規制に対する住民の抵抗、行政手続だけではなく第三者機関による景観評価の必要性等の疑問や課題が指摘された。

四国を元気にする景観デザイン

(徳島大学工学部建設工学科助手 三宅正弘氏)

- ・ ご自身が出演された番組のビデオを紹介しながら、新鮮な観点から景観論を展開。
- ・ 観光資源として景観整備しようとしても投資効果は疑問。むしろ居住(住みやすさ)がベースになる。

景観は都市の競争力をつける上で重要。魅力的な都市には魅力的な人が住む。住む人も重要な景観要素。このような観点から、まちのコミュニケーションの場としてのお好み焼き屋に注目した著作「神戸とお好み焼き まちづくりと比較都市論の視点から」もある。

- ・ 歴史的景観を維持するために市民やボランティアが参加している例(石積み)を紹介し、市民の活動風景も魅力的な都市景観であることを強調。
- ・ 木造建築技術や石積み技術の継承に大学が貢献する必要性を指摘。

丸亀市の景観形成基本計画について

((有)エム・オー環境設計代表取締役 大西泰宏氏)

- ・ 丸亀城周辺や駅前(美術館前)に突然マンションが建設され、市民はびっくり。建設が始まってから市長に陳情したがもう指し止めできない。市民にはまったく情報が提供されないままことが進んでしまう。
- ・ 現実には、都市景観形成において市民が関与できる余地(時期)は極めて限られている。
- ・ 行政に都市景観に関するデータがないことが問題。市民が参加して情報を発掘、整理する必要がある。

(神戸市が都市景観カルテを作成中)

意見交換の概要(Q:質問、A:回答、C:意見)

Q:景観評価の指針が必要ではないか。国として何か示す予定はある?

A:地域特性に応じて地域が主体で定めるべき

Q:景観にもアウトカムの視点が必要では?

A:指標は地域ごとに定めるべき。直轄事業は景観評価を行う方向。

C:国立のマンションの例などをみて、景観法や条例が住民の権利をどこまでバックアップできるかが問題

C:景観は時間をかけてコンセンサスを得る必要がある。専門家、市民、行政の協働が求められる。

C:静の景観だけではなく動の景観がある。

感想

昨年に続きサンポート高松の見学会ということで、学会員の参加者は12名と少なかったが、四国地方整備局建設部の方に8名もご出席頂き、密度の濃い懇談ができた。

景観法の特徴の1つは、都市計画で「景観地区」を定め、建築物や工作物のデザインを確認申請他でコントロールしようというものである。したがって特定行政庁の役割(能力)に負うところが大きくなるが、この判断基準を地域が主体となってしっかりつくること、個性的な都市景観を形成する上で重要である。大西氏の指摘のように市民参加による景観情報の蓄積からはじめなければ、個性のないキッチュな景観列島へとこの日本を導かないとも限らない。

今回の世話人をしていただいた近藤先生(徳島大学)の懇親会での挨拶をご紹介しながら、今回のまとめとしたい。「景観には静と動の2面があることがわかった。どちらも重要な景観要因である。また、人、自分も景観を構成する要素の1つである。このことは新たな発見である」

動くものも景観構成要素であり、また、視点が動く時の景観(シークエンス)もある。さらに、意識する、しない、に関わらず自分も都市景観に参加している。これからはこのことを意識し、都市計画家が都市景観の質を落とさないよう、行動に注意しましょう。(文責:佐伯達郎)

学術講演会

岡山市において、“まちづくり”をテーマとした学術講演会が開催された。以下、その概要を報告する。

日時：2004年12月4日(土曜日)13時30分～17時
場所：山陽学園短期大学(岡山市平井一丁目14-1)
参加者数：約35名

部 クオリティ・オブ・ライフ評価による協働まちづくり 土井健司氏(香川大学 教授)

社会資本整備評価手法としての「クオリティ・オブ・ライフ(QOL:生活の質)評価」について、考え方、方法論、まちづくりにどう生かすかの観点から講演された。



1 QOL評価の考え方

QOLA(Quality of Life Analysis:生活の質に基づく評価手法)は、社会資本整備の効率性を重視したCBA(Cost Benefit Analysis:費用便益分析)に対し、ストック化社会に向かう中で、生活の質の向上、市民・行政の協働による地域づくりを進める上での新たな方向性である。

CBAが便益評価に時間を要するため政策立案等に反映しにくいのに対し、QOLAは、政策に伴う指標の変化を継続的に政策立案等に反映できる手法であり、市民の政策等への主体的関与を促すシステムとしても有意義である。

2 QOL評価の方法

QOL評価については、「小田急線連続立体事業の差し止め訴訟」の中での行政・事業者側と市民・生活者側の社会資本整備の評価に対する成果概念の相違でも明らかのように、アウトカムの判断過程における「価値の重要性のランク付け(重み付け)」が重要な課題となる。

社会資本整備の成果概念は、「アウトプット(行政側によるサービス水準など)」「中間アウトカム(市民が享受するサービス水準など)」「エンドアウトカム(社会資本ストックの質などの充足度)」など複層性がある。この中で、エンドアウトカムの評価は、市民参加が必要となる。

QOLに関する市民参加と政策評価においては、QOL Is(Indicators:インディケータ(指標))の設定とQOLの計測・評価が重要な柱となる。また、Isには「アカウントビリティ」「コミュニケーション性」「コントロール性」「参加性」「地域性」などが求められる。

3 QOL評価の例

QOLの構成要素を「安心安全性」「経済活動機会」「生活文化機会」「快適性」「環境持続性」に分類し、各要素についてIsを設定した上で、充足度調査、充足度関数の推定、代替弾力性と重みの推定などの作業に基づいて、関数分析による都市圏別インディケータ別の充足度、QOL評価の事例について説明があった。

また、高松市を対象とし、街区スケールのIsを選定した地区別のQOL評価結果なども紹介された。

4 QOLに基づくまちづくりに向けての課題

以下の事項が指摘された。

- QOLの現状評価に基づく政策目標の明確化
- QOLの向上のための適切な都市サービスの供給
- 価値観の相違によるコンフリクト(衝突)の発生可能性の理解
- QOLの向上のための居住誘導への社会的合意

部 情報とまちの活性化

宮田啓里氏(株式会社アス 情報部 部長)

講師は、「月刊タウン情報おかやま」の編集、インターネットによる情報配信などを担うメディア界の専門家で、メディア側から見た街の活性化について講演された。



1 街とメディアの関係

街、メディアとも「人のオモイ」できている。企業、人、生活者が交わり、新しい関係性ができるとメディアが生まれる。また、メディア、企業、都市計画の関わりの中で街が動く面がある。

2 街について気になっていること

気になる店の条件としては、「特徴がある」「中身が見えている」「季節感を感じる」「賑わいがある」「女性が行きたい」「価格に見合う、時間に見合う」「接客やサービスの質が高い」などがあげられ、これらは街づくりにも共通している。特に、女性が集まると街は活性化する面があり、街づくりにおいて考えるべきである。

3 街とタウン情報誌との因果関係

街とタウン情報誌は、因果関係が強い。

(例)・街が元気だと個店からの情報発信が活発になる。

- ・街の魅力が増すと、情報の中身が充実する。
- ・街の独自性が出ると、情報にも専門性が生じる。

このため、情報側もインフォメーション(情報伝達)からインビテーション(街に招待するための情報提供)、インスパイア(街を元気にするための情報提供)へとステップアップする必要がある。

4 変わる街のユーザビリティ

今後、二次元バーコードの普及に伴い、雑誌、携帯電話、パソコン、TVなどを媒体とした情報伝達のローカルネットワークが構築され、街の使われ方が大きく変わると考えられる。このことを踏まえた街の作り方を考えていくことが必要である。

<感想>

【受講者の様子】

両講演とも密度の濃い内容であり受講者の1人として多くの示唆を受けた。(報告の内容に不正確、理解不足の点があることをお詫びします。)



(文責 藤岡憲三)

ホットコーナー(特別寄稿)

カンボジア・フィリピンへ

広島工業大学 脇田祥尚

建築の豊かさと貧しさ

マニラのその集合住宅を見たときには、感動で鳥肌が立った。なんだこれは!という驚きがあった。後になって考えるに、こんなにも人間の生活の力というのは激しいものか、というのがその感動の内訳だったかもしれない。最近建築に感動することがほとんどない私にとっては、貴重な希少な体験だった。いいなあとか、きれいだなあといった言葉で、建築を感じることはしばしばあるが、それだけである。

しかしその建築は違っていた。いたるところに人があふれ、モノがあふれ、場があふれていた。道端で洗濯をしている女性たちや、その脇を駆け巡る子どもたち、自転車の修理をする男たちなど、大勢の人を感じる事ができた。4階建て、片廊下型の集合住宅が、それぞれ廊下を向かい合わせに2棟1セットで建ち並んでいる。ラーメン構造なるべく壁を廃したその構成のため、廊下で行われている行為は道端からでもうかがい知ることができる。我々が道を歩くと、2階3階からこやか手を振る人たちに会えた。

私は、その場をみて、とても豊かだと感じた。

人によっては、3m×6mと非常に狭い1世帯の住戸平面や、建物の裏面に垂れ流しの生活廃水、雨が降るとすぐ詰まってしまう下水溝などの貧しさのほうに眼がいきまってしまうかもしれない。あるいは、人にあふれ、モノにあふれたこの光景を、ごみごみした洗練されないものとして、否定的に見るかもしれない。

必要最低限の広さ・部屋構成の確保や、感染症予防などのための快適な衛生状態の確保は、今後改善されなければならないテーマである。しかし前者の平面構成の問題については、様々な功罪を視野にいれ検討しなければならない。

直接的なテーマとしては、現在中間層の台頭などとともに建設が進められているマンションをどう計画するかという問題がある。これは住戸の構成や広さ、住戸の内部と外部空間との関係、外部空間そのものの計画などが問題になるが、それだけではなく、フィリピン人の住意識についても考えなければならない。我々が、外部空間の活発な利用が豊かな集合住宅のあり方だと主張しても、それがフィリピン人に受け入れられなければ意味がない。立派な家具を置き、十分な広さを持つことの方に意識が先行するのが、いわば人間の特性であれば、また外部空間の軽視によって初めて外部空間の価値に気づくというプロセスも人間が歩む普遍的なものであるならば、我々の言葉は意味をもたない。

インドネシアでは、スラバヤで周辺の居住地の空間構成を反映した新しい集合住宅の提案が80年代に既に実現している。そういった提案につながる基礎的な研究の実施が、この調査の目的である。豊かな集住文化をもつ東南アジアでの、新しい集合住宅の提案につなげるべく現在作業中である。とりあえず第一弾は建築学会の中国支部である。



調査対象住宅全景
アジア最大のスラムと言われたスモークマウンテンのすぐ隣に1980年代に建設される。20棟近くが棟を連ねる。



ファサードの鳥かご
通りに向けて片廊下が走るが、その廊下は1m近くセルフレッドによってせり出している。香港の九龍城でも同様の形態が見られ、鳥かごと呼ばれた。



通りの風景
通りには様々なモノがあふれかえっている。通り上空の電線の束や洗濯物も見もの。ぼこぼこ飛び出す鳥かごも圧巻である。



廊下のアクティビティ
廊下は幅1.5mに満たないが、アクティビティの場として活発に利用される。写真は狭い中、トランプに興じる主婦たち。子どもたちや周辺の住人が周りを囲む。



1階にある床屋
集合住宅の1階部分を改造して床屋として利用している。建具で閉じることが可能であるが、通常は半屋外空間の中で髪を切る。



屋上利用
屋上がバスケットボールのコートとして利用されている。ボールが落ちないように高い網が周囲にめぐらされている。土地の有効利用の一つともいえる。

可能性のカンボジア

カンボジアは2004年に始めて訪れた。科研費の申請文の中に、ひろしまハウスのことを書いたのがきっかけである。これまで考えてきた、住居・集落空間の構成原理を計画技術に転化して、NGOなどが手がける小学校建築などに活かすことができないだろうかというのが、その申請文の要約であるが、運良く通ってしまった。とりあえずわけもわからず行って来た。一言でいうとカンボジアはオイシイ。オイシイというまことに不謹慎であるが、様々な可能性を感じるということである。おりしも広島では、県をはじめ様々な主体がカンボジアに関わりつつある。こちらへんに乗っかると大きな動きになる可能性が大きい。

具体的には、小学校を実際に建てることを考えている。そう、そもそもそう考えるにいたったのは、シーラカンスの小嶋さんの話を聞いたからである。うちの大学の特別講義で、ベトナムのスペースブロックの話をしていただいた。当の4年生はどう思ったかは知らないが、私は、その話に希望の光を見てしまった。その1ヶ月後にはカンボジアにいた。現地のNGO「カンボジア子どもの家」の栗本さんと話をし、小学校を建てようという話になった。学生を数名派遣して現場監督をさせながら、カンボジアの適地技術による新しい小学校を提案できればと思っている。

現在各国のNGOによって数多くの小学校が建てられているが、いずれも紋切り型で、かつその型にもいささか問題がある。教室内部と外部との関係が希薄であることや、開口部が小さいため内部が暗いこと、十分な換気がされにくいこと、地域の材料や労働者が活用されていないこと、メンテナンスが行われていないことなど、問題は様々である。今タイとの国境の町ポイベットにて小学校を検討しはじめているところであるが、その大地を覆うラテライト(赤土)を使って、版築工法が使えないかと考えている。

ひろしまハウスの話もある。実際に見せてもらったが、今は構造躯体だけできており、その活用方法の検討を含めて、今後の動きは重要である。その建設には様々な主体が関わっており、以前は混乱の感も少しあったが、今は整理統合され実質的に動き出せる体制が整えられた。石山修武氏の設計によるものであり、石山氏 VS 市民団体の不均衡な関係の間をとりもつ役目ができればと思っている。現在図面をもとにいろいろと検討中であるが、その話はまた今度。

教育のフィールドとして

そんなこんなで、東南アジアでの具体的な動きをはじめつつある。

91年に初めてインドネシアを訪れてから、14年間何度も東南アジアに足を運んだ。特に広島工大に籍を移してからの2年間は学生を連れて2度ほどインドネシア、フィリピン、カンボジアへ赴いた。2度目の2004年には、9人の学生を連れて行った。

東南アジアの調査というと、研究活動のように見えるかもしれないが、この2年間の調査は教育活動の一環である。アジアのフィールドのもつ可能性にかけている。



ポイベットの小学校
カンボジアで典型的な小学校の形式。3教室か5教室で構成される。ベージュの外壁、えんじ色の瓦屋根、片廊下で構成される。



小学校内観
教室の規模は7m x 8mが一般的である。通常、子どもの気が散るからと窓を閉めたまま授業が行われるため、薄暗い教室が多い。



校舎横のトイレ
通常トイレはどこでも設置されるが、使用されていないケースが多い。下水処理の仕組みとセットで整備されないため、汚物がすぐたまる。



木造の小学校
木造の小学校が建てられることは近年ではまれである。通気性や採光性に富むが、強風などに弱く、グレードの低い建築と認識されている。

建築や都市を対象とするならばフィールドワークは欠かせないと思っている。事件は会議室で起きてるんじゃない、現場で起きてるんだ、という織田祐二は正しい。まちを歩いて、あるいは建築を見て、その対象の問題を直感できない人間には、結局その問題はわからないんじゃないかと思っている。へこへこアンケート調査をしてデータを集めて詳細な分析を披露されても、感心することは少ないし、それよりも、自分はここでこんなすごいことを感じてしまったと泣きながら話してくれたほうが、うれしい。調査分析の穴なんていくらでも指摘できるし、調査にはバイアスはつきものだ。

そのフィールドワークへ学生を駆り立てるためにはフィールドそのものに魅力がないといけない。私にとっては、研究室で関わっている大竹も宮島も津山も木次もマニラもロンボクもプノンペンも等価であるが、学生にはそのへんは伝わりにくい。

それと、総合的に関わるといいうのも魅力である。年末に東京の吉阪隆正展を見に行ったが、総合的なものの見方というのがそこで指摘されていた。その総合性と出会える場は、現場にしかない。

成果がでるには、まだまだ数年かかりそうだが、継続的にアジアに通いたいと思っている。

(報告：脇田祥尚)

会員紹介...1

住民評価の高い地域計画・環境デザインを目指して

徳山高専 土木建築工学科助教授 熊野 稔

博士(工学), 技術士(建設部門 都市地方計画), 一級建築士

皆様こんにちは。徳山高専の熊野稔です。広島市生まれで、もの心ついた時から、都市や農村、建築に興味を持ち、17歳の時に都市計画学会の学生会員になって以来46歳まで、細々と地域都市計画や環境デザインの学習、研究や教育をしております。



豊橋技術科学大学大学院から母校の高専に帰って20数年が経過し、その間に、地域からの依頼や関心のあることを中心に研究を進め、論文・著書270編、ISBN登録専門著書16編、になりましたが、マンネリを防ぎ、量より質をいかに高めていくかが今後の課題です。

私の研究スタンスは、地元地域からの要望や必要性のある課題、及び、現場・フィールドでの調査と住民意識評価を重要視する事であり、独創性と新規性、有用性を機軸に、実際の地域をモデルとしての分析や実証・実績を提示する事を主眼としています。

具体的な研究テーマとしては、都市計画では、地方都市の中心市街地の活性化に関する研究、地域再生計画の手法と評価、景観計画の手法と評価、商店街の再構築、都市緑化計画、都市形成史、地域産業の活性化計画、観光地計画、観光まちづくり手法、まちづくりの事例評価など、農村計画では「道の駅」の計画と改善及び地域振興に関する研究、廃校活用による地域振興、温泉施設・温泉街の活性化方策、グリーンツーリズム・交流人口増加施策の手法、村おこしの事例評価、こうした研究テーマを通じて、実際に地域が活性化した町の事例、菊川町や錦町他等がいくつかありますし、都市の中心市街地など苦戦している所もあります。

環境デザインでは「ポケットパークの計画と管理に関する研究」が代表的です。ポケットパークは市街地整備において必要性が高く、地元の住民参加で計画・管理が行われることが有効としています。この他にも私の研究室で研究・開発したまちづくり関連のノウハウが蓄積されつつあります。

最近、取り組んでいるテーマとしては、政府が進めている観光立国に配慮した観光まちづくり計画関連です。特に衰退しつつある温泉街の再生をいかに図るべきかはライフワークのテーマとしており、福祉や健康療養と温泉街再生をいかに結びつけるかということや、実際に山口県の俵山温泉街の活性化ビジョンを2003年度に立てております。

また、産業団地におけるまちづくり協議会の活動が経済交流も含めて、いかに団地内地域に役立つかの実証研究を下関長府扇町安全協議会を事例にして取り組んでおります。

結成後の5年間での良い評価が実証できれば、他の産業団地にも推奨できます。

農村計画では、柳井市の住民参加の労働提供型市道作りの評価と課題についても研究中です。

道の駅に付いては相変わらず、ライフワークとして取り組んでおりますが、最近、島根県頓原町(2005年には合併して飯南町)から「道の駅頓原」の情報交流館の新築の計画設計の依頼があり、2005年度当初、完成に向けて無事動き出しました。

都市計画学会の関係者の方や、私の研究にご興味のある方はお気軽に研究室に予約してお越しください。(終)

会員紹介...2

山陽学園短期大学教授 キャリアデザイン学科長)

渋谷 俊彦

博多駅を出発して、鹿児島本線、山陽本線、呉線、東海道本線の主要な駅、そして東京駅を越えて上野、池袋、新宿を経て終点は渋谷。1987年から106カ所の主要都市の駅前市街地景観を調べています。電車を降りて最短距離で駅前広場に達したところが調査地点です。都市にとって17年は短い時間ですが、少しずつ市街地景観の変動が見えてきました。



写真は姫路駅南口の景観です。調査対象地区106カ所の中で、博多西口と並んで最も洗練された市街地景観です。大手企業により一気に整備が進みました。各建築物の外壁は城で統一されています。白鷺上の城下町だからでしょうか。駅前広場のデザインも秀逸です。樹木1本1本が、自然に見えるように、限られた本数で景観上ボリューム感が出るように植栽されています。白鷺をモチーフにしたストリートファニチャーも、目の前にスッと置いてある彫刻の配置も洗練されています。

日頃、学生達には「ベッドサイトからプラットフォームまで」と題して、住宅と街の福祉対策を教えています。社会性があり、教育テーマとしては時代に合っていると感じています。二枚目の写真は、本学が受託している「岡山県生涯学習大学」のひとつまでです。私にまで、高齢者疑似体験セットが付けられてしまいました。(終)



今後の活動計画

<ひろしま まちづくりフォーラム 2005>

テーマ:“自立地演”の街づくりを実現するための方策
を考える - 語り合い支え合い育てる 自らが
立ち地域が演ずる街づくり -

日時:2005(平成17)年1月15日(金) 13:00~17:30

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ 5階研修室

参加費:無料(先着100名)

主催:ひろしままちづくりフォーラム実行委員会

(日本都市計画学会中国四国支部を含め、8団体で構成)

<平成16年度第3回都市計画研究会>

日時:2005(平成17)年2月5日(土) 15:00~17:00

会場:広島市まちづくり市民交流プラザ南棟

3階会議室A・B

テーマ:「景観法」について

講師:陶山(すやま)幸夫さん(国土交通省 中国地方整備

局建政部 計画・建設産業課)

<『官民一体による宅地分譲事業のモデル的手法』

記念シンポジウム>

日時:2005(平成17)年1月25日(火)13:00~17:00

会場:メルパルク岡山

テーマ:アエル東ヶ丘住宅分譲地記念シンポジウム

主催:アエル東ヶ丘共同分譲事業推進協議会

(共同主催:岡山市ほか2団体、後援:岡山県ほか8団体)

パンフレット請求、詳細は下記までお問い合わせ下さい。

(株)馬場総合鑑定所 (株)まちづくり総合研究所

電話(086)222-6591、FAX(086)223-5839

編集後記

「萩に来てふと思えらく今の世を

救わんと立つ松陰は誰」

萩の吉田松陰の誕生地にある吉井勇の詩です。私は毎年郷里の萩で正月を迎え、松陰神社に初詣に行った後、さらに松陰誕生地まで足を伸ばします。ここは、萩を代表するビスタポイントの一つでもあります。(下写真)

萩市は、昨年萩藩開府400年を記念して萩博物館のオープンを始め、複数の歴史遺産の復元に取り組んでいます。都市にはそれぞれ物語があります。先人を忍び、都市固有の物語に思いを馳せるとき、都市の風景はまた様々なメッセージを発してきます。

都市「再生」とは、その都市がもっとも輝いた時代を1つの目標と捉え、時代にあった新たな活力を再創造することではないでしょうか。都市再生が単なる経済対策として語られることが多いように感じますが、都市づくりに関わるものとして、それぞれの都市、市民とともにしっかりとした理念を共有したいと、志を新たにしたいです。

昨年是世界中に台風、地震と自然災害が襲いかかりました。今年がまさに「災」を転じて「福」となるよう、皆様のご多幸をお祈りいたします。(編集長:佐伯達郎)

編集委員:佐伯達郎(編集長)、上之博文、佐藤俊雄、周藤浩司、隅田誠、福馬晶子、宮迫勇次、安永洋一郎、山下和也



松陰誕生地より萩市街を臨む